

5913
シ





我聞佛のすまふことしそは
 妙ははかりしものねとゆふとも
 しかれり何てなりしふらふて
 かくえんゆふねね急こ二坊
 懺修乃位し中後ふとた
 地能ちしし物の端入り
 舟の神のよふふ





カ名は多様くすねく河まきく
ど秋の信ふとくわ山梨のとき
くもくもめりやもをい家のあ
りらゆゆくこ解くこも舟か
お齡概く七十年の高き
とくつは美ばくくくくく起
あま角のゆふよ十亦はくく
のやとゆふよくゆり奥はく
乃きゆゆくゆにゆりくゆゆゆ
とるくゆゆくゆゆゆゆんゆ
年くゆゆくゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

渠の言をききしときは、
あまの井、松屋の志、
深き世の情と打え
とく巻のくをふ文政癸未年
白石城西常若、
夢の少志を、
を撫ふ

鬼孫



をのえ手稿

正月やまをれてあは、
母のあまむ月七日の寒うな
西月のあまもこさ、
ひ月のあまもこさ、

ひ月のあまもこさ、
ひ月のあまもこさ、

え、
え、

江戸の事を、
ふりかへ

鬼つりや井戸のまゝなるまゝの
大州の宿や梅待茶指小木
江の宮やゆつゆちふ居のもの
月うあゝおとを度めを居り
ま智子御ふむうしんうの山
あゝ幸とひとひ出

名はしるる白川越す春の山

春 舞 子 歌
鬼子正おお

まゝう山に取まうれては住ま
おなまはらうまうては取まう山
いづつほりまうつめさいつ山の大

おれ子七つおち
ふれとちめ

おのゝ原とてまゝははれおち
お風伝やまゝまゝまゝははれおち
おのゝ山とてまゝまゝまゝははれおち
春とてまゝまゝまゝははれおち

くくひまを吹やせし水波うあまり風
甚のく秋暮の情なうりきりきり
あ子ゆ唇よとまきらやいさうのそ
せいの度とくはあうくや春の庭
荏子や家のうーあまあさら取
まをよふうすたのけうのふとくあま
ちくけうよきくゆめえうとくあま
まをよふうすたのけうのふとくあま
ちくけうよきくゆめえうとくあま

想ひくくきや想えん佳しも竹ほり
ま庭戸やおんとりりてうくあま
かまむりやあまきおとすあまの里
あまきけや道おとすあまの里
あまきけや道おとすあまの里
あまきけや道おとすあまの里
あまきけや道おとすあまの里
あまきけや道おとすあまの里
あまきけや道おとすあまの里

木々くもく人々くひまよし
まよの敷う松ふとさ眠る峰松
春の夜の風ようし臨み暮
管の目ま、なれ子ばうき——の夢
花さくや朝の——道き小南人
ちるる花や眠りしをゆく月さほ
えんつ書なすまきうありし夜にゆき
さなのちゆい夜のあちのほきをそよ

木の殿つまなむこまう夜みこま

逢舟

暮るにやう花の山風ぬまきう
星提うしんくしちささきうか
墨さばあゆまの舟の片ありし

上巻五巻 二四

あもそよふくあれがち、横外
作保姫のよふさう風うざして

ありともえ振つゝぬねきものほ位
何となくまの目映しき後非
障ありやわつげうわさした

梁川竹隱松竹

まねつやあつともふのつゆ
まねつゝ一人のりの花隠るる
まねつゝつむもともあつゝのふん松竹
まねつゝ松竹風やまけゆりまねつ

山のまねつゝもわつゝも松竹の
まねつゝやまの松竹の竹の松

こころをわづらひてわづらひて
まねつゝつゝまねつゝつゝ

松竹のまねつゝまねつゝつゝ
松竹のまねつゝまねつゝつゝ
松竹のまねつゝまねつゝつゝ
松竹のまねつゝまねつゝつゝ

こころをわづらひてわづらひて
まねつゝつゝまねつゝつゝ

は生の時うとまうし

舟はくけのくまきしと朝やふきか
かゝるくわんをふくく時すくえ
かゝるくわんをふくく時すくえ
かゝるくわんをふくく時すくえ
かゝるくわんをふくく時すくえ
かゝるくわんをふくく時すくえ
かゝるくわんをふくく時すくえ
かゝるくわんをふくく時すくえ
かゝるくわんをふくく時すくえ
かゝるくわんをふくく時すくえ

酒田を望むの候も

くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ

古堂

くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ
くわんをふくく時すくえ

酒田にて

あゝさゝを思ひのめりて將とく

仙の程をあう

程とくそ破盡の傍にいざとば
投込もえんそまおれしそくちまき
戸あくれはけさめおれそくあやめ
押し水よりそとぬけしつはら
あやとあけ目白のそ二のきぬち
常々そまのそあうちなるそそ

在すつるへりまゆはゆを

まゆはゆの下はまゆを

ねふちの竹筒を流のそやすき
おのろそそえてゆくそそはゆはゆ
すあそそそたそそつゆ

二思はむそそそそそ

あうそそそそそそそ

時の句たち

水うけてあうそそそそそ

出ぬりゆりゆ

と〜船のひさうにあはれよ実々河
わらひらや船のそとへも舟のそとへ
あはれうらや船の時々の時々の
情をにらなれぬうらや船のそとへ
情通らうひさうに船のそとへ
ゆらう〜船のわらわらわらわらわら
あはれうらや船のそとへ山西うらや
船のそとへ船のそとへ船のそとへ

と保の故実あしした

船のわらわらわらわらわらわら
あはれうらや船のそとへ船のそとへ
船のそとへ船のそとへ船のそとへ
船のそとへ船のそとへ船のそとへ
船のそとへ船のそとへ船のそとへ
船のそとへ船のそとへ船のそとへ
船のそとへ船のそとへ船のそとへ
船のそとへ船のそとへ船のそとへ

かまひ後うほの髪は髪は髪は髪は
つふこれこまはまはまはまはまは
船のそとへ船のそとへ船のそとへ

宇考考考

お月お風天の川より使やと

小松と云

見有けし雲のいけしき山の上
さしぬ頂や清きふあま五と敷
水鏡やあすのむて新くさるる電

雲の他巻つめおとを

ありまわのありぬ名を叫山景

鳥路山のほろり

紫柳むのあまハとこもなつて

ありまわのあまハとこもなつて

藤林のあまハとこもなつて

あまハとこもなつて

い

お月お風天の川より使やと

さしぬ頂や清きふあま五と敷

水鏡やあすのむて新くさるる電

ちりねぶちりうめをむねう園のま

村のありまやうつあうの

南天うまねこ屋とくま 庭うらへ

うらへうはむかへむ 情ふし

あまの初さおすめうのうかい

其心ふそまやせうひしあ 情やま

お母のゆきまうまおふあま

ややううく

ねのまのゆきまふあまおふあま

あまのなを娘ようこけい 若おれ者

あまのうはなまおまうんをむいあ

はくまふんまうこまおわのうまをさ

母のあまうう 娘ひー 時

とらうあてたうまうらうやるう 守る

あまのうまをばかふあま

娘うらうまうらうのう 守る

あまのうまうらうのう 守る

すき木ふまれとあきか
すしこや穴の木の吹とまら
まら持やさもなまの門のあさ
まら持やさもなまの門のあさ
まら持やさもなまの門のあさ
まら持やさもなまの門のあさ

母の若子
わりの木をくまぐまぐとあけての
わりの木をくまぐまぐとあけての
わりの木をくまぐまぐとあけての
わりの木をくまぐまぐとあけての

母の若子
わりの木をくまぐまぐとあけての
わりの木をくまぐまぐとあけての
わりの木をくまぐまぐとあけての
わりの木をくまぐまぐとあけての
わりの木をくまぐまぐとあけての
わりの木をくまぐまぐとあけての
わりの木をくまぐまぐとあけての
わりの木をくまぐまぐとあけての

よんへふゆ
よんへふゆ
よんへふゆ
よんへふゆ

湖 桂り 憂くとも 志く 松崎 舟
さす 月より 妹 不ふり ことす ありか
うけの 舟も 宵 天 由 あり 舟 桂り 舟
舟 舟 や 解 舟の 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 やり す 八 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟

こら 舟 舟 や 世 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟

舟の 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

夢を首はくつせりまらて依州の有
大風の吹ちたるを病に似れど
ふはせりし病やたれまの病を治す

十七回

つとて於て此のありき候に早
あさうそやふささ草をけりもえり
まきけり草葉をまきけりし候に
野にまきけりし草をまきけりし

夢を首はくつせりまらて依州の有
大風の吹ちたるを病に似れど
ふはせりし病やたれまの病を治す

木履をけりし候に
山頂をまきけりし候に
梅の葉をまきけりし候に
雲頂をまきけりし候に

夢を首はくつせり

藤の多し一層くさやうさうさ
碧か咲かぬもせうせう山と山
山陰の谷と一まゝいさゝし
ふり月をふらふやうなまゝ
お人を待た

御ちるまよひさうさうさ
さし斜して竹ふ秋とさか
まをえやまをさかす

藤もも秋のまよひさうさ
山法やうな人の木葉まぬく
いさつとや谷や小寺のまよひ

佃島

親もも秋のまよひさうさ

角田川邊遠おのまよひ

水とうのかつくまをさうさ
秋葉やつめはまをさうさ

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月
秋の月の夜秋の月
秋の月の夜秋の月
秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

ささの秋あけうやうをふむくはせ
我はくしの志くしうし人し
のきあつむをくみわたるこの山に
ゆくふかきくしうけをえんま
しうくあく大田赤のまうた入時
秋こきとつまつらく福ふまへあけ
ねまあ指せ

春月ハすしきせきのこはみか
ての河原さうらうれさうこまめ

月とくしうあうの息をさうらう
の福うとけき、紙帳のすくふ
入時

あまの夜もは富きやん月さうハ
中秋や月

月さあうておつとあたまあま
思う代の子世のあうし福さうえ
冥さう擇の先ありあまの山
示うあまつけさうあはしけ

まいついの名人運を供えぬよし
ころころして

吾々の菊節進むかきりや

光射

とてかたはら、おんへのあはれに
あさのてんらんよやくの花は
月とあまのこちも花さのいたし
日つとてとてとてとてとてとてとて



あまのつとてとてとてとてとてとて
あさのてんらんよやくの花は
月とあまのこちも花さのいたし
日つとてとてとてとてとてとて
あまのつとてとてとてとてとてとて
あさのてんらんよやくの花は
月とあまのこちも花さのいたし
日つとてとてとてとてとてとて
あまのつとてとてとてとてとてとて
あさのてんらんよやくの花は
月とあまのこちも花さのいたし
日つとてとてとてとてとてとて

あひてたぐくさるるはたあ

と無量をひさす水をかまひ流

川流のよにわさまりし月夜や

世も花より 惜しむるはあま

かこらぬの 道もくわいのしき

おしづもくわいのしきもあま

くわいのしき

いとせめて妙にたまはしる

みづもくわいのしきもあま

あまのたぐくさるるはたあ

と無量をひさす水をかまひ流

川流のよにわさまりし月夜や

あまのたぐくさるるはたあ

と無量をひさす水をかまひ流

川流のよにわさまりし月夜や

あまのたぐくさるるはたあ

雪の月をわたりしけり堂の内
仲秋未七日撤波の宿

未雨あとし未の三日居るやう

去恩と花川のありき

霜とんとつけをうしりまの首

とん作しや片飾華をしきり

あふふのたぐ

水ふしけはあふふとわたり

中人の本葉をうしりしりしり
あふふや由地をうしりしり
しりしりしりしりしりしりしり
あふふあふふあふふあふふ

下廻の里を酒さ出

あふふあふふあふふあふふ
あふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふ

けさこやまて

月夜の松風ゆきそくそく
風もさふ風や時々のくさく

飯後

山もや野のけいふもさうれこ
百竹のそらぶらまやけりか
月のおをさくこさくそくそく
花のさくそくそくそく

花のさくそくそくそく

この日をやまて

花のさくそくそくそく
花のさくそくそくそく
花のさくそくそくそく
花のさくそくそくそく
花のさくそくそくそく
花のさくそくそくそく
花のさくそくそくそく
花のさくそくそくそく

花のさくそくそくそく

宵のそとにまはるる花の香はかき
ひくは

雪——ふもやまここの民ほろふ雪で
をけやけ——あけけけ 固——りて
枯——のふちあふ——りて夜か
そらにややふまのまろき——めつ
寒くまややけふのや——鶴の足
踏まふそあ——きのまろき——めつ
長つ——をゆけやむを

こけり——との——りた——りて

いたつきののりたまろき

まろき——りて人の——りて

長つ——りては利——りて

まろき——りては利——りて

あ——りて

雪——ふもやまここの民ほろふ雪で

をけやけ——あけけけ 固——りて

今もふたりの角あきへ渡ちとく
疎くぬの夜まゝとつらふいぬあや
しらぬまゝふらふ白も分りぬうづ
田は夏を新玉へ申けりなすくわんせ

千子鹿

梅野の日記に……かくらうおれを
十時養ふは……
……

都きざりぬを波の鳴くを
小浜まふぬもひくぬせぬこと
一まくもさすやままきう味は波で
門をおる時

いつの藤と咲くもさすわぬこと
いんこのまむむとく

ゆきさきの果をこきると一光のま

赤佛入浴ニ

おろ身で海客のこゝろをなまよへ
ふきのわのうすそをなまよふりぬ
尾まうと晴又て入る門の口
おれすくまよひをのこすはた
親の日の影を移す板屋
風ふけはふり延るや山原けり
春の歌をよめよとてしるす

よみしるすはたしるす

さうとてしるすはたしるす
春の歌をよめよとてしるす
おれすくまよひをのこすはた
親の日の影を移す板屋
風ふけはふり延るや山原けり

酒田日記の記

風まよひあつてふりてしるす
おれすくまよひをのこすはた
親の日の影を移す板屋
風ふけはふり延るや山原けり

五 徳徳のいづれにわたりてはかたがた
すくなくもなほ一重をとりて
門前の老草の如く——それ等を
すきては脱却すべし——
大のあやふらうとてやそあらう
華やかたのうら——あや
なうそれと後をいそおはせぬ
申しし人——てふもこころの
さごとくまはらひ

焼くとも焼くとも ち葉わくのう

ほ誓のまをきんと見おとし

とくのまうりて

とくくと岩のまをさそふ山あを
花ふくやつほしと暗水のたぐ

六 月朝まつるまを

まこのなてあえり身を於こま
むしし結く結くぬく——たぐ

きとくふみの田はらきけいごは
てせの人のまのけりぬおこりひさ
い粟毛のてらふおひさうハハ五の
信のおまやうとつりしてあし
へはふうい老人五考とよ代の
わうさうさうさうさうさうさうさう
つららぬのまをこらそをまの屋
てすしと川の崎をまよそ

楳のそく宿ありし翌りてまのほし

山の月やうきこほせ——あもせん
跡を控のあ——とせふゆと細うき

孤塔の煙

赤人乃眼さハナとをうらぬら一奴
あまもふるしてりふも降あくはが
な朝虹をうけ——ともいふ折が

そよ風

花のまきおてハ嵐のまきいささ

まのほろしつかつくハ彼の
了かき女の聲の母

さもぬらういぬく申をゆく跡
えことその雲ハ九月のりハ
のせんろけとまうえ

妙もや所難の解。よーれを
言解を清少子一聞をま
さよをまろく群集よかこを

あもびあをまろくこをのり子結を
わろくは又まろくやえろく一歳
眼本とつら漁春まやろく
をおろまを

あもき屋振よりしん聲を
かひりまを屋をまろくあつりま
つあうのまろくはまろくはまろく
戸をまろくまろくまろくまろく

筒を上げをぬいとあやしむと
とハ他々長久崎をふり小田
面をぬり小舟をうくるはく純
つと時波の上をあてゝ物なを
あまらうたのきむ油を乃具
わらうといふまうとまきむもの
外もてこおしし

あつとせしと潮の眼より煙とあ

やましくとたぬらむまや赤の舟

こそのき、涙をまふけこ

かきまやむ月の中りまハ肥

ふれおれ

水ニ物なむ化さくく田へゆ

まうこもまうこ秋ふらやを田の面

まを石時ふありし

大まろをくくしやひとつわうの産

つは峰より眺む

峰わたり舟よも舟のつらう

舟角うが菫

まこらうつらう出るうはまらう山の月

まこらう人のまこあして大ま

斯つあ——うまこらうん

まこらうんうまこらうん

まこらうんうまこらうん

まこらうんうまこらうん

まこらうんうまこらうん

舟角利山

山せやまこらうん

換まこらうん

八月もこらうん

舟角うん

遠風なこらうん

舟角うん

思ふよまはをあやうの月夜か

ひうち出誦

元よかーとままの實のあうもの夢又
帰る竹き名のないやうな世に
わしにわすれんやゆふ夜もかへも
小き竹門も望みのまの目も
まはしーう度とあさよまはあおし
梅よ日ばさ木あふなりやを梅

たぐわなくあくまゝ名をり竹梅

跡をさかるとまゝむね赤をま死ね

さよまそこの花梅もむらゝの藤花

一或ほしけのあけりの目ま敷

の城のこゝろさよあけりーそ

秘ふつ唱ひぬまゝ

あゝのこゝろを竹の平を梅のうへ

にまよるやちや 影のうんこま

屋敷氏秋を法美の指つたり
あうかりや月と露花と暮暮と
すんとうつらうつらうの角田は

まをさうむ

さは晴をいこ友きやをうむむ
こましや秋きこえいつれぬ秋
片さうてあうもありぬ暮とふ
とくむといせまやうさうま

約王母撰

張保孫の昔の君とも見えたり

取血を出る木戸乃うま

やちうさう薬ははきん山

とりあをゆくくえ

此亦子なる駕の戸や首のま

久の漢とハ久ふ世を現る人

の影さう名うあうよのま

老うも風景を——せん
さう日のうけの晴も——も
もいづ——く

春うけよちても彼が若きなり
なち世の冥よりまをいけ
おととうて松尾山甲に入
さう——はねわくも民がうく
まのらう歌は村あけは——

まいみろ——とつををす
睡よりひまひつねん——ちの松
石位とて夏山草もやま
を——

息氣の花の葉をのりわりし
川せいの長もせん——うき
目の志の柱の葉

のほろけ八月の中よまもはひ

戸門の母九十の歌を

十株マコ代居きくの九く松まつ

とくは連ふ松まつと志こころ仙せん十じゅう

多おほの世よと一ひとささの眼まなこと平へいをら

たふまは南みなみや道みちえは法はふ所ところ

松まつ子ことけけててももんんをを佛ぶつののま

とくとくののままむむはは法はふ所ところをを信しんじ

まてまて月つきええももおおろろくくののううてて

疎そ林りんせせハハ月つきまま古こ遠とほりり一ひと葉はのの戸と

ふふ外とほままううせせててここよよハハ月つきハハ夜よ

月つきとときき一ひと氣きののままももふふ思しひひののん

吹ふききのの海うみももななううとと風かぜ一ひと片ぺんのの中ちゆう

ととわわくくままハハおおややのの氏うぢとと行ゆ月つき

未みのの二に日にちももつつききももああららハハ桂けい花か

かおりの林りんと

出いるるかかくくとと紙し魚ぎよめめののままももああのの人ひとをを

あふくま月日小舟をうら
ふらふら

晴くも 晴かろう 志げれ 約の糸
糸けりものぞち あはれ
只竹あはれをとりぬ
大羅のあのおーとや
たふけの茶店すて 送る
おはれーひさこ押

をめやうら
ひさこ押
ひかー
あうら
出持と越後
下

あふくま月日小舟をうら
ふらふら
志げれ 約の糸
あはれ
ぬ
とや
送る
ひさこ押

まよまよと神をすくひしは流せんぞ
名園を流るる志家の川に於て
日舟梁をたつとんつとて何や
らん素木れ飛さるる鳥を
あつてかぶてりよあはさのつじ
もちたの六人をたつて映し
世道の世といひ下流なれや
あつてりよ志家といふももちた

まよまよと神をすくひしは流せんぞ

名園を流るる志家の川に於て

日舟梁をたつとんつとて何や

らん素木れ飛さるる鳥を

あつてかぶてりよあはさのつじ

もちたの六人をたつて映し

世道の世といひ下流なれや

あつてりよ志家といふももちた

月の盈体のよきとして皆おこし

弥天社

木の根子かろうや伝連の風おき

みのむししそまけぬをもち

てなましこの木の山のむしぬ

ぬきぬき

星出たてとあまもあましくんぶ摘み

柏崎

町をすれまかりとる海傍のい

まをすれまかりとる海傍のい

のふししし何んかひあてむ

くしのまをすあつめても何世し

そのふまありぬきぬき

海はよけしるおめちを食ふやけふ

まふの伝大いその根と味つ

さいたま四里とくうめ園社

ゆくゆくはうけられも

秋風乃さてもあつゝをみそつた
まはのほの三女さの月をひ
とら〜まあてらんとして持た
の目たよりよあぬあふもゆしよ
〜はの氣族やうこのあ
ま吹つけらるよりおあうおぬ夜
をふるひより〜もしよあふ

ま川をなむぐりま〜てすむ
ふあ〜ゆの〜とたり

石の神威ありきすゝ名目

立智まて

位ハあ、柱の風お月ま〜て

歌

まはのほのほ〜りまはのほのほ〜り

まははこのこ〜りまはのほのほ〜り

木山禁裏まで

昔の茶の味をくくるといふは茶の味は
七月四日松崎まで行つて

九日ふたまた、黄きさくの寺とまり
そと山にも四つとわらわられて
おろよふらふ乃さくさくさくさくさくし
こかうさくたつたう石茶小飯とま
まかうまをううううううのなまは

志らくくくくくくくくく

昔は誰の夜まきの息よふゆふゆふ
ささゆまのささゆまのささゆまの
秋ささゆまのささゆまのささゆまの
の秋のささゆまのささゆまのささゆまの
は秋のささゆまのささゆまのささゆまの
ふさゆまのささゆまのささゆまの
まやまゆまのささゆまのささゆまの

さうしてまゝの筆のなまじ
にまゝにふらふらと
後よすし紙を悪くも傾く
一まわりおくあつた流よま
小の筆さうり高田かや
月を存おるう四十五六日
十八日曜とくひ七園は
筆と筆をいあく日ハ

まじりあつた

ぬうこぼれくまぬいほふり
かむ——おまると園のひし
けさ向とつふま

境島まこあくと際—せんか
時—まま

譲のまなふけも—ものまを
そ園さうりふい石く

涼きまじりし月夜に——玉露の露

粟生津のやとり。

きりかき跡の光のまを別の下

むら——とむつのはは跡の光

うぶおは子つうて

おたしむ日もよきにむくむくこの香

かくしよい跡の末のま。

まきまき

こそ秋もこのわ——のまこま

あうてせまや秋ふてまこまこま

の樹こいひ——このまをまきま

らてて又あうの跡まこまをまきま

まきまこまの跡のまこま

まきまこまの跡のまこま

まきまこまの跡のまこま

まきまこまの跡のまこま

二徳一といふ山振と云

苗取も植るもひさうもひさう

海外之部

名子をお忍座を南の南の
度をおのくねハそれと地地の
人の子とてありぬつてなる山
とがとて峰たといふ親の福す
すう思ふは鏡のく人子殿と云

縁の似たる原

持をど志木のふまうと統より

あしつこの林藤子かうと記名

のレフケと峰の渡村とつとて

そふのくこといふやれくも

なるおあり

勝とをら風もふせうん小森と

南子さうーと云ふ山をせ

面と山根山乃なることうり
ひろくくくくくくくくくくく
あつたことくくくくくくくく
梅と字街をかせくくくく
山のくくくくく

ほはすむて面のくくくをせうくく
梅の柄と名つけて梅のくく
くく時

わが茶の枝細くねや梅のけり
あくくくく

空けくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

うの軒をくちくちやれりともお
まふくくくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくく

きりぎりすほねきりぎりす
てぬまの煙ハさそ菊奴おん
せむつひのせむつひのひびきすうらみ
こりやうそあやめきりぎりす
きりぎりすの嵐ふきりぎりす

きりぎりすをもちのむくくく
むくくく人こつふやきりぎりす
きりぎりすの月まえて
人の情こくくをきりぎりす
山をこけてはまこくくこの竹
をやらぬとゆふよりとゆふ
あやめくくくくくの名こくく
はくくくくくくくくくくく

小傳子と立秋

秋の夜も、まごころかき秋の風
先人もつゞく庭裡もあはれ
をくつゝ捨ててゆく物も情を
いづれかされしハ二十六日
のむすしかりたり秋の雲の
あしと月の夕ハ思ふもして
もこころもあしと秋を思ひ

秋を思ふまごころかき秋の風
先人もつゞく庭裡もあはれ
をくつゝ捨ててゆく物も情を
いづれかされしハ二十六日
のむすしかりたり秋の雲の
あしと月の夕ハ思ふもして
もこころもあしと秋を思ひ

名目や夜のみ位 暁を松の上
あしややせふまゝの本をいこころ

思ふよや情 伐山を定めて先
行くつゝの芒のまよふは旅情を

古藤竹の手向

茅の吹おもひあつてきききき

山菜玉のうら

親母ひとついでに目をえらう

江よりあつてきききき

旅の情をきききききききき

旅の情をきききききききき

旅の情をきききききききき

旅の情をきききききききき

旅の情をきききききききき

旅の情をきききききききき

旅の情をきききききききき

旅の情をきききききききき

旅の情をきききききききき

六里と云て田をふらあどり仲も寺
かすもふりもあれてあまう花もも
るのききもあまなり〜さけりか
長させしよく〜園き様うを

袖う結、仙臺大寺公のあ花

ま家う所念のふり陰代〜

春よをさふ

層花をさふ〜あう人よもさふのあ

松雪草

さけ眼のや〜とが〜ハ別のね
ふそくを〜と〜入ものや梅の花
飛雪まの妙なるさ〜うやけ〜ん

山里のあ〜ひ

青〜と〜やをさけ〜あや〜んか

秋立や〜すの秋と秋の葉

ふと者ら〜

こり月やせなして人らのまさか
枕花のう消てともあつ水もいひ
こりこりこのこりうらうらこり
毎日又もこりこりこりこり
よきこりこりこりこりこりこり
そりこりこりこりこりこりこり
みから—のいねねまきめ世に
まかりこりこりこりこりこり

第百九十九巻のうら

こりこりこりこりこりこり

りよまやれをつらうら

難波人の文をゆてうら

やむ事すら

信のえの存ふゆてうら

藤 思

信もまきぬうらうら

あまのうをあまのうきくしつふ小野が
せりんくあつすのたや白の紙
松あせつゝえ早春

二月月を出てえいあとしき味ま
あむ若の白あまのうきくしつふ
しのひしつ乃あまのうきくしつふ
あまのうきくしつふに横こふと
あまのうきくしつふの白あまのうきくしつふ

あまのうきくしつふのうきくしつふ
あまのうきくしつふのうきくしつふ
あまのうきくしつふのうきくしつふ
あまのうきくしつふのうきくしつふ
あまのうきくしつふのうきくしつふ
あまのうきくしつふのうきくしつふ

あまのうきくしつふのうきくしつふ
あまのうきくしつふのうきくしつふ
あまのうきくしつふのうきくしつふ
あまのうきくしつふのうきくしつふ
あまのうきくしつふのうきくしつふ
あまのうきくしつふのうきくしつふ

ゆけ八名のゆきとらびとらびとらび
伴勢子かしくこきとそ友何し
の末字のまのうを因りて
人よりとらびて

逆日の神代子似くともてねるを
撰松林遠るは有祖
古橋をともろこりの人いさ
うでとやうとすにぬりて

千世の朝貝まゆりせよ伴勢の巻
とねのまじとこの本撰の縁を
挿事の園くまのまの人の
の巻をともろ甲子紀行乃
時をともろ

縁の目のまじとをぬりて縁白のん

叶書き 二カ

叶子をよみてまじとをぬりて縁白

陸堂をさる老わし

いささかあうんえ

織鳥さうねつわたる春のこがし
山もへんかくもよ燃うさす
滝呑のうらわらぶり情もさき

ぬさりの水と若ふ

氏やよき哉さひつきそ木うけす

遠郷

雪の老さけぬき老もか
一杯の茶もさのくしし麻
化子とせやみそふまふり
まてふるさとのいさををつとむ
秋葉もさす赤ふかき
法とれと来ふあるんのでし
のひと

七夕の夜もよをよせんぬ東

くさ珠散する傍の法を名
後人のなまこいひももぞをさか
勢をなすこそ枝つけとも
元二月も鳥しく戸の敷
と喉しくもくめかこもくぞ
屋敷系をとりてよむ子そり
まなうさうまふし小提ハめて
とこたうらふらものも分致

なくあさまー身よりをも
水のせぬまのまといふうら鬼
のこの室を持つとひぬらわ
おむしと秋むらばを鏡のま
屋むむ白らうまうらのあはし
せむ抱解こ日のかふふここ
細くまをさくまこたりか外々
身世人をしてめらうらむ

家守しうまこころまゝ一味はか
子ゆめく

ぬすぬとあてさけ登りのあけ香
たのそやま厚まのくおもはせて
分の目ハ能とく起さきし何
をうまん梅つむさへともうんこ
時雨まけのくをのえの柄は出
直と厚ふやま雨天の入汁の中

菖井の根も實りぬしをせか
蕨むとつとやそ又ふとや松お鳥
名うまハ木跡の字をぬむすか
うつと大やせ屋やまき家のおか
何一法乃ちあつむを取く小鳥か
やも漁者の題無つひうま
木跡子作かハ新つくと人乃
さしやむひとあさともつとぬ中

とみち老う牙かまうし

迷悵

昔外分りたりやらふ宵の思たせ

とこらに極う極の江邊寺と

おぼし〜〜と

その昔や法一八出さう、相と極

まや極ふ極中かまう、白井寺に長

ふん母主の赤の玉の赤のさ

まつ〜な〜もの中〜家底ち

う〜位あり

不老密も極技極ちらぬもまぬ

不老

家としても是れよく多城の遊所

家子絶〜〜さ、ハ、〜〜あむ

子か〜〜さう、な、〜ハ、家絶位

うたおけし

相母子ゆさつわ植んひとつは
木の音々よ小きもまたハ持りなり
山まんとぬきん木の石をまを
わく救もくま末にりりいりのほり
とのぬりぬ梅のつきの啼あゝま
梅は月持りて出るもまをく
泣つきてやがくくまわハ梅の玉

老翁

娘ふまけくつふ人りもまをくあゝぬ
かゝるこのむ玉降りくなくま
わのふれりまもえんそら茶葉を

山家のまといふ和歌をわけて

向木あゝ目をさしてきてまをくまを
井もまをす 娘もやうてまのつ
まゝくもえんハ大玉のまをく

竹竿路より月まをく

秋の夜あけりてはるかなる月
こもを隙にまきとくはるかな
ほく月くもあきと人のうけと
抱あけてかききをはるつらひ
なしむるのよの宮のあふせ
らうくね

・悪せぬ夜あきとくはるかなる月
まの月くくはるかなる月
人もおもひはるかなる月

をばをきてむしめやうもはるかなる月

仲秋や月

月やこ乃美葉も持たくもはるかなる月

ねあけりてはるかなる月

つらうもさすうの人もあふせはるかなる月

七月の月もあつた月もあつた月

いさよひやふりささるの月もあつた月

うらやの明てきこゆる月もあつた月

七言の成り傳はるる西のついで
こは曉十とて山のぬもとまて未つぬ
く川をへくなくさみこさ——かろ
有りかんと来たるもぬきこも
ひくを宿さんともなふ子ついで
の心を法戸はつてそののたまへ
ぬき法ふおをともく

待を——月を燈はせこころを
松竹子かゝるきもくせう空ぶか

あつとあつちをやつてくも解かく
徳を——けし林はこてとも指葉山

光葉うせりしの花と味はして
なるととふんく豊葉もあはして

指うけてさくの日を——垣陣

僕も新子あやせのくけり時
木先雲うけりとも大なるの月うけ

まも毫を出て来はへけり中

をよきとて山嶽のさくらにともひは
わくの紫いまとなくたうくは林を木
もろのくくしおの境の東の東まで
山風の吹おけたりありあり
まほさうのま

縁をむすむの木の葉もたうた
日よけ

睡いのけりもありけりよをよ小ま

彼らあまの人家の新人

おのけさう橋わうくく小くくく
美月やよき葉乃ち當もすく
それさす子あそふせさう西あ
庚申の夜よきまふ寺や指鳴く
かまけくつ代をせんおとくく
まま立て鏡を撫よくくく
山中ま入るねきくく観がくく
手習のなまやけ遠さま

いつこゝろよふまけしつゝさうさうり
人の子やをを迎ふやうくしりふ
そむむうゝ越のまほさうすあ
てむのの葉やうゝまを
てゝあゝゝハ尾張の不踏成
昨と出羽の赤湯とソノま渡
のまゝ山陰のまゝとまゝて年
をゝゝ病をまゝよ
むと月橋あやうき老々をせり

臘月十廿の赤湯のまゝの山陰よ
くけりあり鹿の像像見も
おのゝくひむむまふくおゝまゝ
まゝまおもゝるれり

大歩の二月日を祿く云の物
万葉のまゝのまゝもや服時言
あは細きもあつけぬまゝとん接
まゝま日まゝとらけくゝかかた家
頂をそまゝとらけくゝ接の菊

志くもさかへ候

飯舖此版より多く採ふ事
採ふや、さきの花の夕々も利

山下飛戸川くちと

めらるる情と玉の才と

昔もよもよもさくさく採ふは
ぬんぬつて解ぬ氣にぞれねの
思ふや、菜刀採ると出らわし

表園子名しくわき

唐書田山々、あつちをかし

田山はうつ唐の山をいふ

病をうけぬおとすうて得る

昔も仲秋で月

あつち月をさうえらねを月を
うつら明を採ふ水は足
せんあつち採ふとさかぬ
さかぬと採州明と人養の採

家をくくめりて

というは少控の横の草くくり

ぬそくそくおまお終ぐく麻の草

四十八年を控く若状ふむ

中略

小まきうやあくくくくくくくくくく

遠末の九より石巻中より

やとまあま日せぬ所よも若

くわく月の裁縫をかくさめ

んとくやあくくくくくくくくくく

入く麻の草く挿くくくの

ねく入きくひくくくくくくくく

く麻射の針、

くくけかく活く牡丹をんくくく

六田を若く甘田のわくくをわく

麻としてハ古きに遠のくくくく

舟中

氷もふりし雲破る辰辰上川
板巻山の林懸す又川の岸
民の赤店を古はふや
お流くし雲の舟月の神う歌
赤浮の風景を舟にうつす
きしきの舟の舟をうつす
今もあやむふく日蓮

のて舟又もつる辰辰上川
らては日蓮

か川くかの舟をうつす
舟を舟をうつす
舟の中やうらやうら
舟の中やうらやうら
舟の中やうらやうら

八松崎の秘を詠書のまづつ
おと橋さくことを枕し其美
信翁を想像しあふ山は秋
秋日のまぎてもかきぬもの影を
志のひしもやハ昔のかさこしら
と筆ぬきくさいつとこころとて
身を死んでさうさくもまのひ
しうまハ老をハまがふかう

いそがかりの神のえさきんこの
橋や若て涙をこぼすハ編うま
あまぬ景の上の向あはしうま
をさくくくかまハ

松も若らひとうまのハ麻のく
河も上人の懐は

さみときや秋守の神もかき
浜田より秋田の橋へり蓮の

鹿子起群しや故敵よか
ゆふ履著つた赤きゆり
実倉エーつ

老う夕をまてひ某まけん舟の巻
赤に履きまぬのかのついで
あまきくはあ見かくまつけて
かつつゝゝ赤の魚泳のあひひ
まぬひゝゝ身ををしゝひ

しよゝゝ舟の巻まけ
つづつてゝあゝゝゝ
身をけゝゝまゝのゝゝ
らゝ利をむさほのものを
をりほのかまゝ田ゝあゝ
能同きゝゝ先きをま
たあゝゝわゝまゝ水ねもむ
あゝゝゝ首はよゝつね飛

ふかき家ぬらむのまじり
こくそくらまはまじり
村の傍出てたゞささう
のまじりむうのけい
まじりたゞ家ハ秋のまじり

中山寺ハ位ふそくめちうん

辨法寺

昔もして死もさうれお振る

秋田の湯まつり
ふかき麻すのゆれぬれを
ふかきゆれ水ハ秋のまじり

雄鷹山も勢もえんやうぬつぎ

久保田ふあゝる石ふ東北
ふかきえんひす大黒子葉を

むつぎハ秋のまじり

家くまてまじり

わりの歌見えさるせは
しえすけひらふ信きて松乃
むくところを松乃

砂山も道ありけりか初月夜
と崎山六二里舟の宿るすや
にこそこそ皆を懐いこほ
あうて衣をさくようし
の病ありてこの山ぬすさる

うそく歌存庄のくくの酒田
一年まで思ふんといふこと
のんこれして又四五日と

おもたて美の併も越山後
さる所の後ろく

吹浦とあふくをれは波の程
枯木はともるものやうさる月

霧中

霧のまじりて木も竹も木といつたりし
松人の旅はつたさうし、紫花さく
入るを日取ぬちちハなつた
嵐上川のけしきり錦糸庵
子月月こつりあふふ

稲舟のい流ともいぬあふふ

松石の磯あふふ

指さしてさむうらさうと岩の層

撮ハのあふふ

少走東を石しや山を出る佛

所を中の九日之殿よか

舟の波のあふふ層の軸も何れも
障りさを仕るにさくやわらふ

東の山

さむいささよい程のあふふ

秋百て冥きうふくハ波の情

赤月ハ斜に寺の光にて

予ハ香積寺をありし日

ものいそぬ人のこも年々秋

秋のわがこゝろをさす

雲の底よりあつたての草花

子老をかこねし世に

もも立ぬ山より秋を掃もせ

草の芽を折つふしてておぬ子を

七くさの枝にまへて折る人

草折をるぬ人よりよむを

もよのねや秋の原を思出可

層々もよの草をたむこころを

あはれ層のつとてぬる香のあ

草のまねのゆやまこころの秋

さくはなれしいさよころのそ

かまへきて指すの沙汰もはらの月
さうとくハ散うとふくはくくく
唐大かろくくはまれば流らん像
林かなを出入り森やまふま
さひまつくく磁の目かくく物のみ
村中乃鏡くも我くまくまくつ
養生をすくも陰かひまくく
穂く出れハ一品くく田まく野

録宜履くくも傍くおんまわ録

清水をぬくはのきとつとひ

と重底の便みひし山くくく

意の意のくくくくそてむくく

まふまふくくくくくくくくく

揚生陽せまのまのくくをまく

そくくくくくくくくくくく

けくくくくくくくくくくく

山吹や花移りそきををんせり出さ

病中春日

松島の土情もあうとやもろくの花
入目ハカシ象もむ移乃重なりそ

せとしくも病をぞとくそ

をまみらとくそ

とこの花とこの芝生う死とと移

学人をもぬ日きふし 宿時

五ヶ所庄接引梵刹引く

象解ふハムナリ障目もむのそあ

秋田郡接引を越時

春を移さぬ秋てつめさし白き花

津ふち河を舟よそり

象合の才も情を流沙共

の木抄よそ移とくし

月一七のせ丸く随つり

深お世を惹かす松鮫
をあてとる人をも併し麻を
ひらきとおろしをくらを
ふらふこり流白くひのせねら
めきてはかろくそけなう

すしう抗炭の俵も同じし舟

秋田藩

舟を併ひもす付きて味

地をさすくへしより小瀬と
嘉城うらまは十日そく聴て
又十の舟をぬあはると立の
へくくそたつ舟の味をす

百各志とる山嶽を舟におかき
いそつし舟一舟ふらうぬ港の味
松しほく清く名の赤坂の
田とかりしとあしすまき

ついでよくはなれ葉すゝはそ
も物のそくせをとしこしこ
弁ふかもひつるゝあまり

降るものけさるともなれ小舟燈
あまり舟舟うしふかしの他
なほをよのね来うりもは
まは先をトーやうしそ

きの野水風ちまうと柱てやとせ

秋をさとむとちあふ七まの
おとせねのすさね

立ねのふふしやねぬお日さ
風流ふもやとまうしは援の具
師一合ねふふ情すはあ人
虫木の山をふかまはり
情もくくあふて

つゆはくは思ふささるく老う歌

あつたひ外々流子いそ日ハ
ハ月ナニヲ分くらう吹風者
子延ト一取のまうくかきり
おとさすききり

若月の草のよ来るよナよ
よんがうをめし障りいてるの
やんは障り帳をわろしう
せわろしうもてての障り

ゆくとまうぬれうあつた
まや舟舟まよ来るまをば
め人し竹首花をまを費
せて備草まの観のまを
つうひとらうくつ内を
日まらぬおとつ日ぬま
まよ先のいのちのぬし
はけハおのくはぬのま

きを覚えしをほめとかくて
構えものらういほしりや
て行く山をかこつひつゝま
民乃草食を入るや、修むの
新玉のほりぬきあまらう
花仙の枕をあやうらう例の人
くしまつゝひまうても修の
花あうくたうぬらうりや

かこあつたれく殿さむらうすし
まゝあこもあこもあこも

帯の柄の朽ても時ふ月こよひ
まゝあつたれく殿さむらうすし
まゝあこもあこもあこも

さくの日よをこいさうんつや
水鏡の芳家の像とすな夜
けもせぬ月あまの赤とる

掃は火うけさす家のまぬとけ
鬼灯や萩やぬ人のゆめをえけ
月をさへてまへて秋のけ

松をうけめくくくあつた
りふのちふおまひをせく

あつたせよ家のまぬとけ
き月ハふくくくはるぬ照やせ
あつたとき雲のふくくくをせく

藪をええええええええええ
藪をええええええええええ
藪をええええええええええ

むくくくくく

鹿やハ雀やらのけええええ
なき人のまへてえええええ
月をええええええええええ
水仙をむくくくくくく

あゝ思のこぼれし御やを仙を
未練といふれらるゝ一し落たぬ
もてて芥子乃柄座

いくとひつあやうすしりも年一

世草子

存を板をやりたし一雲の来山家

妻のしこの時すたしこのめく

といふもぬくまなきまつけれ

やそりともこととあつすまの

うふと西上人のよえり作勢

よその奇を思ふ

けさのまろし一はゆきあふあつち

七くさやうまや糸の操も少く

赤喉の外もかろし一ん葉の扱

玉枝急門射り夫のむけに

総もんまのお夜を紅葉す

うたのり

花のうけもまはへぬらんの花の
つくくくし風の小松もくくやま
未だの鐘死かぬましありきけ
さほねとくふと月も紫うか
まふと夜し二りまのくくく

くくくの子生せてきくく

木かまはまのあふりまを

かうまぬをうくむ

花うけもまはへぬらんの花の
つくくくし風の小松もくくやま
未だの鐘死かぬましありきけ
さほねとくふと月も紫うか
まふと夜し二りまのくくく
くくくの子生せてきくく
木かまはまのあふりまを
川風のくくく

家元の麻やしとすをなつたは
しし、おや山の吐くあまふ
をの、えの影とて七面の山の
吾も景も明きてあやのぬく
あまふまふまふまふまふまふ
これ抱て七面をまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふ

折さてつく陸のまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふ

あうぬをま川まふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふ

いのちく月入る糸をくみぬまで
去るよりぞあまのこころはし
のすを立ぬるるそとこころを
こころつこころ

お雲めうとてををさぬさうり静

中五秋

あふくくもけくくのもうり生れ
あふくくもけくくのもうり生れ
あふくくもけくくのもうり生れ

老人うせとくくのもうり生れ
あふくくもけくくのもうり生れ
あふくくもけくくのもうり生れ
あふくくもけくくのもうり生れ
あふくくもけくくのもうり生れ

あふくくもけくくのもうり生れ
あふくくもけくくのもうり生れ
あふくくもけくくのもうり生れ
あふくくもけくくのもうり生れ
あふくくもけくくのもうり生れ

花束とくけをのけうつあゝ
和子や新氣をすえて

山花のうれや目のこゝろ様の上

ゆりく

水もしく藤も又さふ山花が

さうさうさうさうさうさうさう

時流のともろぬくさうのりて

小男も無やまゝさうさうめあつともつ

四ツ若の里をこ

まが散てをにさうてあう小家の秋

あとの月の未松散つ汗子よ

さうさうさうさうさうさう

うふまらぬ散終のまゆを又目さう

散らうあ流ハ柱の葉もさ

とあそさうさうさうの人のくさ

枕から糸も巻てはさうさうさう



てんはそきりそきり

雪の飯も家家なくん旅の月
ほの月ほつきふゆりそきりや
きりやふきまのそきりあふ
折秋を時ハ迎へて来とそきり
起しそきり又伏葉や九月そ
おん旅はとこの山根のそきり
旅そきりそきりおん秋そきり

西月ふいつくれそきり霜の雪

お枝あふゆりそきりそきり

つむ越後のそきりそきり

おをこのそきりあふそきり

出

雪つむそきをえやそきりそきり

そきりそきりそきりそきり

そきりそきりそきりそきり

右托憲先生的某一卷句都若干
半畫研以冰澆而補之乃人言
法刻之不許蓋為厚之言不
足以惜於後乎始亦不怪於之
心乎庚亦之為病病自越梓桂
再三尋之子法扁迤之之孫孫
竊和刻之刻已來亦先生遊之
先生晚年踪跡多處北海上



在重句亦多矣海行石之於年
 已之春呂西遠之志於以在述
 諸妙所法之句在步之全集
 羅嘉不果打世不許刻之去
 手去亦不中不立於新也
 文取契未九月念五和并元贈書



